

眞淵頭書云、かげろひは本はかげろひ火なり、古事記に難波の宮に火つきたるを、かぎろひのもゆるいへむらとよませ給ひ、萬葉にかげろひのたゞ一目のみ見し人とも、かげろひの岩がきふちともよめるも、はしり火石の火なり、また萬葉に東の野に炎カゲロヒの立ちみえてとよめるは、明るる天の光なり、かげろひの夕さりくれば、かげろひの日もくれ行かばとよめるは、夕日の光なり、かげろひのもゆる春とよめるは春の陽炎なり、俗にいとゆふと云ふ、又蜻蛉をもかげろひといへば、萬葉にかげろひてふ所にかりて書ける多し、然ればかく多きが中に、火と日と陽炎と蜻蛉と四つありといふべしや、蜉蝣をかげろふといへるはいと誤なれば、數には入れずて、誤のよしはいふべきなり、又古事記にかぎろひといひたれば、きとけとは通はしいふべけれど、下のひをふといふはよろしからず、

〔碩鼠漫筆六〕絲ゆふ考 清水濱臣の據字造語鈔云、按するに、遊絲は古く絲ゆふとのみ歌によみ來れるを、此永久四年百首には、七人みな遊ぶ絲とよめり、是より先にありしや、大方見あたらぬやうなり、遊絲の字にすがりてよめれど、理り協はず、近頃の歌には、凡てよむことながら、心あらん人は庶幾すべからぬ事にこそ上と見えたるをおもふに、古く絲ゆふとのみ歌にもよみ來れりと云へるは、いともしも不審き説なり、そも、遊絲を歌の題とせしは、此永久の百首よりさきには、いまだ見もおよばぬ事にて、これを又絲ゆふとよめるは、今すこし後なるべし、さるは丹後守爲忠朝臣百首に、野外遊絲の題見えて、例の遊ぶ絲とよめる歌四首あり、按ふに、こは永久百首にならへるなるべし、さて其外に今一首兵庫頭源仲正た野邊みれば春の日暮の大空に雲雀ともにも遊ぶ絲ゆふとよめるありて、これ絲ゆふとよめる歌の根源とおぼしきなり、此爲忠家百首は、一題八首の例なれど、遊絲の歌のみは、以上五首ありて、三首缺たり、此百首詠ありし時代は、永久より二十年許後なる、保延の頃なるべし、此爲忠家百首は、一題八首の、故は、長承三年十二月十九日、中右記に、今夕院渡御三條鳥丸新御所云々、丹